

福岡

福祉活動専門員の

# ま な こ

社協活動前進のために

No. 8

昭和52年12月発行 福岡県専門員連絡会 まなこ編集委員会 印刷 福岡コロニー



## もくじ

- 憤怒弱き彼に代りて奮起すべし (通信・長門石) 二P
  - 連帯と前進に向けて (面筑ブロック専門員連絡会) 二P
  - 求める点・線・面 (筑豊・京筑ブロック専門員連絡会) 三P
  - 活動志向の起点 三P
  - 専門員の支え (ミス社協) 四P
  - 福祉からみたむじゅん 四P
  - 専門員のたわごと 五P
  - 共算の試案と実践 六P
  - 完成間近・社会福祉センター 七P
  - 磨かれるカーブミラー 八P
- お知らせ — 県社協人事異動—
- ※ 事務局長 ◆ 中村知久 (新) 総務課
  - 長兼務 ◆ 野津重松 (退職)
  - ※ 地域課長 ◆ 松永俊文 (新) 募金課
  - 長兼務 ◆ 今村政幸 (旧) 民生課
  - 施設課長兼務
- なお、従来の福祉課は地域課と改名。

# 憤怒弱き彼に代りて奮起すべし

通信  
長門石

拝啓 貴兄には、先般お便りしましたように、私は地域内のニードの異なる個々の人達の「生活」がなりたつような条件づくりという活動と、全市的視点での福祉課題を克服する活動との二本柱が、社協マンにとっての基本だと考え今日までとりにくんでいます。

貴兄は教師たるもの、クラスの子どもの達の個性把握の上、目だたぬ子にこそ教育者としてのエネルギーを傾注すべし、と口ぐせでしたネ。私も視点は同じだと考えています。

先日、このような問題にとりくみました。N地区のろうあ者夫婦(奥さんは健常者)が第三子出産のため、幼児二人の保育園送迎(ご主人は早出主婦宅の勤務)洗濯、夕食準備をどうするかということ市福祉事務所に相談。ヘルパーや介護人の制度は非該当で、行政サービス皆無の回答。

これを身障相談員のI氏が当方に相談にみえた訳です。予定日が近づく中で、婦人会、保育所、校区社協、民生委員、ろうあ者仲間、親戚、市福祉事務所と、この解決のため訴えて回りました。

しかし、二人の婦人ボランティアと生保家庭のH氏らの気持よい返事をきき暫定的な条件の整備を得た以外は、「自分のことで手一杯。他人のことは手がとどかぬ」これが多くの人たち

の返事でした。

「生活」を維持できる条件をつくるのに時間のかかった割には、苦味を食する方が多かったようです。

この活動からも、一つの「家族」という単位を守ることさえできぬ行政サービスの欠点を今さらのように知らされ、「重荷を分かちあう」という理念のコミュニケーションづくりや福祉のまちづくりが、住民の生活とのかかわりの弱さから別次元の存在であったことも知らされました。

福祉関係者という人々が不在であることは、運動のあり方を本腰入れねばならぬことの警鐘となった訳ですが、中でも多様な個々の住民のニードに対応できぬ法サービスの欠点は、ハンディをもつ当事者やボランティアや住民に、その解決責任を押しつけ、相互扶助の美名で回避しようとするものから、表面上非協力的であった「自己の生活と闘っている」市民にこそ、このことを知らせ改善する訴えが必要であると考えています。

「私は生活が苦しいから身体障害者(または、ハンディキャップをもつ人)をやめた。健常者にすぐなりたい」と逃避することができぬ事実と対峙している彼。しかもハンディをもつがために憤りをあらわす手段の弱さをなげく彼。この地域内の多くの彼とともに奮

起することをこそ社協マンと思っております。貴兄には寒さに気をつけられ、子どもたちのため益々頑張られますよう。

敬白

(久留米市 松尾)



A



B

今年の秋は、未曾有の晴天続きの、残暑と思わせるような、日本晴。おしみなく、黄金波打つ稲の収穫、特産の柿・紅葉を眺めつつ、両筑ブロック専門員連絡会を去る十一月四日、杷

## 連帯と前進に向けて

両筑ブロック  
専門員連絡会

木町公民館で開催した。

国道三六号線がバイパスになったため、目の前で自動車の往来により、会議室が激しい騒音に悩まされながら、県社協より、市町村社会福祉協議会実態調査について、協力の依頼説明あり、つづいて歳末たすけあい運動を中心に七社の(うち一ヶ所欠席のうち)意見交換を行い、昨年度歳末たすけあい見舞金贈呈実施について事例発



C



D



E

を、市町村ごとに調査し、又その他のことで、甘木市では、社協活動運営資金作りについて、昨年「博多玄海シヨウ」六十一万円の益金あり、現在積立てている。本年は、「藤田洋行一座」を招き、益金は昨年より上廻る見込みで、特に本年は在宅福祉資金にあてる予定である。この両筑ブロック専門員連絡会は、おそまきながら、去る一月、甘木市にて準備会を開き、六月・十一月に会合実施、今後の課題をもちよって、討議を行うことを申し合わせた。(甘木市 才田)

- (構成メンバー)
- A才田(甘木市)
- B砥板(夜須町)
- C田代(小郡市)
- D師岡(朝倉町)
- E日野(杷木町)
- 遠藤(浮羽町)
- 山本(三輪町)

# 求める点・線・面

筑豊・京築ブロック  
専門員連絡会

炭坑節の主題地、筑豊地域と純農、漁業の京築地域内で起きている生活福祉についての問題を明らかにし、問題解決への道案内をするために、日夜奔走しておられる専門員の集いの会についてチョッピリ紹介させていただきます。

餅でなく、木を育て、花を咲かせ、結実させるべく努力を続けておられます。ブロックの社協にしても、層が幼稚園から大学クラスといった具合に、専門員も一年未満の者から五年以上の者とは、格差があると思います。その格差はあれども、大学生は大学生なりに、幼稚園は幼稚園なりの考えで、それぞれの地域における住民のニード(要求)にこたえるべく、老人福祉、児童福祉、身障福祉、低所得者対策等、

夫々の解決のため、お互いが問題を提起して検討し、県のアドバイスもあおいで建設的意見を出し合う熱気の中に求める点、線、面は一つであるので、聞いていても気持よく、この熱意に対し、頭がさがります。

ブロック協議会の運営は、専門員メンバーの個々の力が十分に發揮されると、集団としての力を百倍にします。丁度筑豊ブロックも、住民福祉のために、種々の課題にあたりながら、更に成長を続けることを希望し、皆様の御健勝をお祈りして筆を置きます。  
(田川・京築ブロック 駐在員 水野)

## 活動志向の起点

社協基礎  
セミナーの参加

機械的な繰返しになれなかったよう、反省させられる。

また、志が現実に合わせて、したがって事のなかに埋れ、吸収されて行く、はっきり言えば何かにふり廻されているのが実態かも知れない。

就任当初から局長会議、専門員研修会、ブロック連絡会等に努めて参加し、その都度初心を甦らせているつもりであるが、社会福祉理論のなかで引用される「揺りかごから墓場まで」のとおりに限界がないところに、もつれた糸にからまれたようにもたついているのか

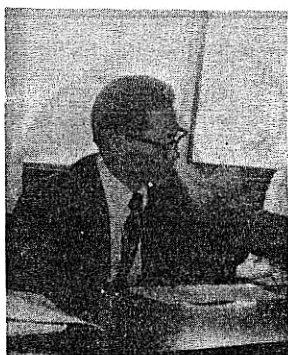
も知れない。

本年五月県社協において開催された第五回社協地域組織活動基礎セミナーに初心者として、民協総務と共に参加した。「社会福祉協議会の課題と展望」の講義にはじまり、事例発表、問題把握の知識と技術、演習等きっちりつまった計画で研修を受けた。むしろ鍛えあげられたといった方が適当かも知れない。

帰途、民協総務いわく「あなたが誘うけん参加したが、今日はとてもやおいかんやっただですやなあ、年寄りが聞

いてもあんまり分りませんでした、社協やら民協の役割がいよいよ大役になってきたことだけはようわかりましたばい」その言葉は今も耳に甦って来る。福祉とは何か……みんながしあわせになることである。そのしあわせのあり方、あたえ方が歴史の変遷で変ってきた。戦前のもてる者もたない者を助ける、いわゆる救済対策から住民参加に根回しする社協の役割等々の講義、また広報活動の演習で「見出しのつけ方」が傑作である。八つの記事を読みつつ、頭をひねりながらつけて見たものの、蓋を開ければ似通った見出しは一件もない。次に、社会福祉調査票の作成演習も、分野の選択でまごついた。とりわけ、座長に指名され汗顔の終始であったが、結果は、参加して何かを学んだことで福祉の役割に得をしたことになる。当時の研修資料(テキスト)をひもどきながら、初心忘るべからずの念で原稿を起している今日である。

社協事業の取り組みについて、したい、してほしい、どうして取り組むか上手下手はあるうが総て努力を必要とするものばかりである。「自力で仕事が出来ることでない限りは、必ず一年前に動き出すべきである」と。これはあるセミナーで記録していた言葉ですが、福祉行政の下請けにならず、なんでも良いから一つだけなりと地域福祉のため開拓したい、否しなればならない。  
(前原町 藤井)





須恵町

一 氏名 今泉寿代  
 二年 令 二十八才  
 趣味 茶道・編物  
 業務内容 なんでもやさん。会計  
 並びに世帯厚生資金・町単独の  
 貸付等が主な仕事です。

三 自己のPR 愛称チャコ。一番末  
 つ子のためわがままである。  
 あざみの花が好き。  
 好きな異性像 心が広く、抱擁力  
 のある人。

### 専門員の支え

社協

一 氏名 上村光枝  
 二年 令 二十才  
 趣味 登山・レコード鑑賞  
 業務内容 専任書記  
 自己のPR 社協に来て一年と七  
 ヶ月。やっと仕事の内容も、わ



浮羽町

# 福祉からみたむじゅん

世の中は、人々の生活がいかに文化的に豊かに秩序正しく、暮らしてゆけるかが発展の尺度ではなからうか。

社会経済の発展により個人生活も複雑となり多様化してきた。十数年前までは、社会福祉関係者でも、相想しなかつた幼児の夜間保育など「や低学年児童の「カギツ子」(留守家庭児童の学童保育など全く考へる必要もなかつた。それが、今では大都市のみならず、都市化現象の町村に至るまで波及し、対策を講じなければならなくなった。県内市町村社協の福祉活動専門研修会でも研究するまでになった。私達は、この問題の現実を見極めるため、現地訪問調査を数班に分けて行なった。まず、驚いたことは、保育所とは、名前だけの個人の家を一部改造した建物に看板が掲げられ

かりかけてきました。最初のうちは、初めての事ばかりで、どうやればいいのか、不安でいっぱいでしたが、生まれつきの明るさで、今日までやって来ました。これから

も、まだまだわからないところが沢山ありますが、この若さと太りぎみの体が頑張ります。

好きな異性像 心が広くて側にいると、安心できるような頼りがいのあるやさしい人。

ており、数十名の乳幼児が真剣に愛情ある若い保育の先生に、愛護保育されている情景に感動した。

そうして、考えた。保母は、立派な建物の施設だけでは駄目だ。このような愛情の中にこそ立派な人間として大事なものを身につける幼児が育って行くのだ。正しい愛としつけが、特に幼児に必要なだと考えさせられた。

さらに、ここで義憤さえ湧いてきた。それは夜間保育は、法律が認めるところではないから……と行政が何らの保護援助を行なおうともしない。無責任だ。一方、昼間保育の一般保育児に対しては、法律を定め措置児という名のもとで、保育費用を負担または、軽減助成しているのに……。

人間誰でも平等である。差別があつてはならない……にもかかわらず、このような結果が現実としてあることは、福祉の視点から許せない問題だ。特に昼間

一般保育園のことも、母：養育義務のある家庭に昼間に養育する者がいないから、国がその子の保育措置をする。このことが法律上当然化している今日、夜間の保育所と保育児は駄目だと決めつけることは現実無視も甚だしい行為ではなからうか。社会生活は複雑である。夜間の仕事と働き場があるかぎり、それに就職してはならないと誰が言えるであろうか。夜間就労する母を一概に乳児は夜間こそ母の乳房でねむらせよとは一般論に過ぎない。

彼等もこの子を好むと好きさるにかかわらず、この現実にあえぎ生きていくことを思えば、義憤は私一人ではないだろう。

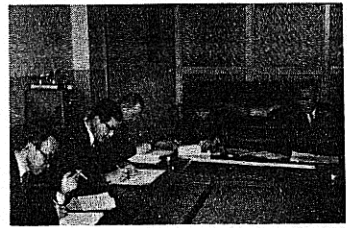
カギツ子(留守家庭児童) 対策は、低学年児の放課後の学童保育に、ある程度行政施策を行なっているA市の事例は、私達に今後の指針を与えさせてもらった。ただ感心するのみであった。各小学校内に設けられた学童保育所に、その子らには行ける仕組み。保育は学校教育の延長でないから、学校と別の保育担当の保母の先生のもとで遊びの教育やしつけなどが自由に規律止しく行なわれている。

厚生行政と教育行政がうまく組み合わせられれば、わされ幼児の健全育成のため、意を注がれたあり方に、私達福祉に關係する者に、指針と希望をうえつけられた。

有意義であり感謝にたえないものである。(筑後市 紫原)

有意義であり感謝にたえないものである。(筑後市 紫原)

有意義であり感謝にたえないものである。(筑後市 紫原)





## 専門員のたわごと



浮羽町社協も看板をあげてから22年、そのうち看板のみの社協時代が7年、住民組織の任意団体の時代が5年又そして法人設立以来既に10年の歩みをつづけており、その間おおかたの社協が経験してきたような発展成長への幾多の過程をたどってきたのです。

時代の移り変わりによる住民のニーズに対応してゆくためには、運営機構など実働への体質改善が必要になったり、そのための役員会の新陳代謝など、社協はつねに住民の求めに即応する実質的な活動体制づくりに努力しているのです。

こうしたなかで、わが町社協がいちばん誇りに思い、力強く思うのは何といってもK会長の存在です。会長のことを書いたら後日お目玉を頂戴することになるかも知れないが、会長は今年満80才、それはあくまで暦のうえでのことで、実際は65才前後です。その証拠には、まだ老人クラブに未加入なのです。進歩的で若い時代感覚は驚く程です。

どこにいかれてもどの会合に出席されても決してためらうことなく、卒直な意見を述べる。しかも、それは心から住民のしあわせを高めることに根ざしたものだけに、当事者や主催者にチクリと応えることが多い。ですからこのユーモアたっぷりのズバリ発言は、ときには、微笑みをさそうこともあるが、また、ときとして、敬遠されそうなこともある。それが町の福祉活動の輪を広げてゆく強心剤の役をしたり、清涼剤の役をしているのだから、まさに住民の認める福祉のご意見番なのです。また、遠慮のない発言ができるのは、会長の人柄なのでもあります。

だから、住民の信望厚い会長をもつわが町社協は、また住民の理解と協力も大きい。会長はつねに「住民の期待に応え得る社協活動を」と積極的な対応を考えているのですが、専門員の私がついブレイキ役のこともしばしばで、会長は思っているのだろう「どうしてうちの専門員は活動力が低いのか」、私自身も思う。「会長の期待に応えられない本当に何もせんもん員になったのでは」、「一生懸命がこの程度、能力の限界かな」とつい専門員の泣きごとがでる。いいにくいけれども、私が社協の専任職員としてこの道に入ったのは、昭和38年2月、まだ45才の働き盛りのときでしたが、もう14年になります。よく辛捧したものだと思う。7・8年間までは、幾度やめようかと思ったことか。それはどうしても私たち家族の生活にかかわる基本的人権が守れそうになかったからでした。でもどうしたことか私の考えはやっぱり仕事の方に走ってしまい、仕事に足どめをされ、家内をずい分泣かしたものでした。しかし泣きながら支えてくれたのも家内でした。それから年がたち、年をとるに従って今さらやめても再就職の道もないだろうと腰を据えたが、もう私も還暦を迎えた。

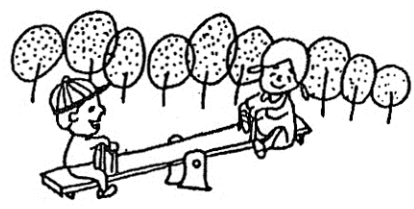
これからの専門員及び社協の職員が、私のような苦い経験をしないで福祉活動に専念できるような処遇体制を是非つくっておかねばと、私はつくづく思う。「福祉事業に従事する人の福祉を守ることも大切なことのひとつではないだろうか」と。ついでにもうひとつ、私の現在までの在職14年のうち4年間は専任職員は私1名だったが、法人設立後は、2名の事務体制で10年になる。その間、私は若くてきれいな20才代の未婚の女性と2人で仕事をさせていただき、望んでもできない職場環境になった。しかも現在まで4人目の女性なのである。何と恵まれた専門員ではないだろうか。お世辞でも「遠藤さんは若い」と言われるゆえんは、たしかにこのお蔭に外ならぬと(家内には内緒で)心の奥に秘めているところであります。

ただ、この女性をうらめしく思うことは、2年か3年足らずで、好い人ができて、とんでいってしまうことです。ようやく複雑な社協の仕事に馴れてくれたと思ったところで「良縁」あり、後に残った専門員はまた新しく1から出なおしの職員指導のくり返しである。2人いても忙しいのに毎日の業務のなかで、じっくり落ち着いた職員指導の時間なんてないのが実状で、現在の女性もまたいつ「さようなら」か結婚までの腰かけ職員は、きれいな女性程この不安の可能性は大である。会長は「専門員活動に後顧の憂いのないような事務職員を」といわれるが、現実はまだまことにづらい。いうにいけないこの悩みを、専門員の(たわごと)と思ってほしい。(浮羽町 遠藤)

歲月は急みなく流れる川の如く、光陰矢の如しとか。歲月の経過は実に速く、九月の声を聞けば反射的に十月からの共募の仕事が浮びます。昨年度から旧来の犠牲を脱皮して、募金大作戦を展開して二年目となり、それだけにお金を集めることのむつかしさと、それに附随して起こる雑音抵抗を精一杯正面に受けながら天佑神助を祈りつつ、フロンティア精神で押し進めている。

私の町は社協自体にいろいろな問題と矛盾をはらんでいる。その一つが法人認可を受けて、すでに三年目になるのに、社協活動の機能を遺憾なく発揮するには、その中枢機関である事務局体制の確立が第一であるけれども、事務局職員がおかれず、専門員一人で、仕事に追われ、弱りかけた魚のように、片泳ぎの状態、その中で共募活動である故に右顧左眄する訳ではないけれども、あれを思いこれを考えて、いつも駆走の現状である。町の規模は、隣のA町とは同位(世帯数、わが町二二五九、A町二二四五)で町からの補助金は、A町の半分であり、いろいろな発想が理解に苦しむことが多い。日本の隣国中国が八億の民をかかえ、首脳陣から庶民階級に至るまで国民服一色に、しかも国民全員が意欲的に「農業は大業に、工業は大業へ学べ」の宣言葉にひたむきに国力の充実と目ざして精励しているように、私は心の中で、社協は、A町に学べの標榜で、大衆を相手に共募活動によって町民の思

## 共募の試案と実践



いやりの気持ち、お互い助け合う心を育て、培うことは、結果として社協の理解が深まり、協力への誘発と考え社協活動が軌道に乗り、零細な社協の予算に対して比重の大きいまとまった淨

財が歳入となることは、一石二鳥と言ふべきで、ここに焦点をあてて危惧と希望が相半ばの心境で、試案と実践に踏み切った。

わが社協共募の目玉商品は三つの特筆に価するものがあると考え。

その一、わが町には残念にも法人組織の事業所が殆んどないので四苦八苦の末、一般商店・病院・建築業など地域性が高く、社会性の深いところを百軒余り名簿を作り、一ヶ所当り二〇〇〇円を目標に戸別割りと別個に募金を提案した。ところが予期していたように、戸別割りを拠出した上に、又同じ家庭から重ねて募金するとは何ごとか戸別募金さえ税金の二重取りと言われている今日、二重の共募は絶対に理解しかねるという意味が専らで、否決されそうであったが、お世話して頂く社協役員の方々のお勇気と決断をもって前進するのみ、地域福祉の向上と言う大きな目標のもとに、町民心情の育成を前提に奮発をお願い致しますと繰り返して、手に汗を握って懇願し、やっと諒解して頂き、昨年は、目標額三四一、〇〇〇円に対して、実績額一、〇五三、三四一円の淨財を社協役員の献身的な毎夜の訪問によって夢想だにしなかった成果があり心から有り難く、感謝と喜びで一杯である。

その二、赤い羽根は、従来から戸別募金の領収書に添えて贈っていたが、昨年度から初めて小・中学校児童生徒へ赤い羽根をおとして、友情、いたわり、

はげまし、思いやりなど、心情の陶冶に天与の福祉教育の好機会として、両校長先生にお願いをして相当の実績をあげて頂いている。

その三、歳末たすけあい募金は、毎年婦人会が募金をして、その中から社協へ五、〇〇〇円頂くのが慣例であったのを昨年はこの陋弊を破り、先進社協浮羽町に学び、婦人会との連携を保ちながら、二〇八、四一四円の実績となり大変喜んでい。

さて、募金額を大都市に比較したら小さい町だけに、天と地の差のあることは当然であるが、一戸当りの平均額は四〇〇円をはるかに上回っていることは、計算によって明確である。

ここ二・三年位は、各方面からの苦言、至言、雑音を大小漏らさず大切に傾聴して定着するように努めたい。

北欧諸国が高福祉・高負担のマイナスの面が出て言々され、日本は減速経済に入り財政の窮迫につれて、福祉の見直し論が出ていることを考えれば、適正福祉の適正負担でありたい。

住民の福祉に対する意識は、生活の根底となる心の琴線として、理解と協力を計ることの大切さを痛感すると共に、その衝に当る役職員の真摯な努力と、多くの人々に接話し話し合い大衆の教知を結集して事に当れば、難事も自から道は拓けるのではないでしょうか。

(H・Y)

須恵町社会福祉協議会では、地域住民に対する総合的な福祉向上の推進を図り、その基盤とするため、昭和五十一年度に福祉センターの建設を計画、現在その建築も約四五%に達したので、ここで着工に至る迄の経過をご紹介します。

従来より社会福祉センターの建設は全住民の願望であったため、町長が上京の都度、厚生省等へ補助金交付の請願を行っておりましたが、五一年九月社協の事業として計画。理事会において資金の調達方法等についての協議をし、最終的に日本船舶振興会に補助金交付申請書を提出する事に決定。ただちに青写真並びに申請書を作成し、同十月会長が理事代表と共に上京し、厚生省へ援助を陳情すると同時に日本船舶振興会へ補助金交付申請書を提出した。

当時の社協としては、船舶振興会の補助金を取りつけるのは、宝くじに当るよりも難しいと言うことで、半ば諦めていたが、念のために、昭和五二年二月、会長と理事代表が再度上京して陳情した結果、四月二十日になって、総事業費八千六百万円に對し、六千四百六十万円の補助金交付決定通知がされた時には、事務局一同、小踊りして喜んだ。しかし、喜んでばかりはいられない。当初の計画を遂行するにはまだ資金不足である。さっそく先進地を色々と視察し、資金調達方法、センター運営方法を研究し、何度も理事

会で協議した結果、「おなじつくるのなら、より内容の充実したセンターを」と言うことで設計に変更が加えられ、一億三百万円の総工費となり、残り三千八百四十万円を社会福祉施設振興資金、並びに県社協の民間社会福祉施設振興資金を借入れることとなった。この借入金の返済に当っては、町議会において債務負担行為の議決をお願いした。ところがいざ申請書提出という時になって「社会福祉センターは福祉事業法第二条に該当しないので、社会福祉施設振興資金は融資できない」という回答がなされたため(センターの名称に老人とか身障者という事をはっきりうたえばよいらしい)仕方なく、県社会課、県社協、北筑前福祉事務所等に

相談した結果、年金福祉事業団の厚生福祉施設資金が借りられるという指導を受け、理事会に図って急きょ借入先を年金福祉事業団に変更、窓口である福岡銀行本店におもむき申請用紙を受領、六月に上京して年金福祉事業団より記載方法の指導を受け、七月に借入申請書を提出した。八月には、決定通知を受け、県社協からの借入金も同様決定通知を受領し、九月一日より着工、現在に至っている次第です。最終的に多少の計画変更が加えられたが、五十三年二月には竣工の予定です。

センターの概況については次の通りですが、竣工後は福祉充実のためにあれも、これも、と計画を立案中で、事務局としても大いに張り切っております。

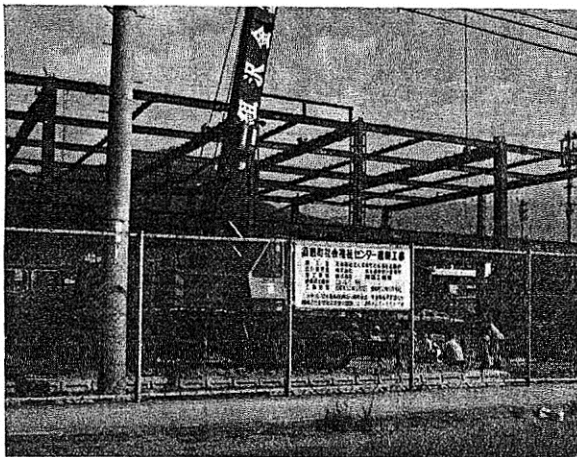
須恵町社会福祉センター概況

- 一、敷地面積 二七〇〇㎡(町より無償貸与)
- 二、床面積 延一〇〇九・五㎡(鉄骨)
- 三、総工費 一億五百六十万円
- 四、資金内訳
  - ◆日本船舶振興会補助金 六千四百六十万円
  - ◆年金福祉事業団借入金 三千三百四十万円
  - ◆民間社会福祉施設振興資金 五百万円
  - ◆町支出金 百万円
  - ◆寄附金 百六十万円
- 五、施設内容
  - △一階▽センター管理事務室、会議室 健康管理保健医務室 待合室 研修室(老人木芸作業場)
  - 展示室 機械室 玄関ホール 身障用スロープ トイレ(含身障者専用) 倉庫
  - △二階▽老人図書室(イロリ付談話室) 会議室(和室) 談話室 湯沸室 身障児者機能回復訓練室 ヘルストロン室 超音波温浴室 トイレ(含身障者専用)

(須恵町 田ノ口)

# 完成間近

## 社会福祉センター



建設すすむ社会福祉センター



# 磨かれるカーブミラー

最近是非常に車輛の数が激増して来た。これに伴い交通事故も増加している。なぜだろう。

第一に自己本意の独走運転が原因しているといえるだろう。私は思う、相手に譲る気持があったら事故も減少するのはとーいまの時代にそんな馬鹿げた事を考えていたら生存競争におくれてしまうと一蹴されそうだが、一分間か何分の一秒かで事故は発生している。

福岡県下における昭和五十二年上半期の交通事故発生件数は一万五千五百十件で、死亡者数は百二十二件、全国でも事故件数は多い方だ。このような事故によって失われた多くの死者は殆んど中年層に限られている。とり残された遺児、家族の者の悲しみはもちろんだが、必然的に今後の生活の問題等が出て来ます。

最近では免許証を持った人が非常に多く、普通の家庭の中でも殆んど二・三名くらいは持っているようだ。この人たちが毎日通勤或いは仕事で運転している事を思えば、家族の者は安全運転を祈らなくてはならない。

事故の原因については種々あるが、スピードの出しすぎ、わき見運転、信号無視、この様な事故は場合によっては、本人のみで終る場合が多いが、時には幾多の犠牲者を出す場合もある。

次に交差点における事故が極めて多い。その為の事故防止策として、カーブミラーが至る処に設置された。筑紫野市でも七百ヶ所の設置がなされている。

このミラーの働きは、大きな役割を果している。未知の場所を通る時、カーブの危険を知らせてくれるのはカーブミラーにたよらなくてはならない。この大切な役割を果しているミラーが、泥水やゴミで汚されていては折角の前方確認の役も果せない。

そこで筑紫野市老人クラブ連合会では、クラブ活動としてカーブミラー磨きを推進して、多くの運転者の安全をねがっている。各単位クラブの地域内に設置されているものだけ責任をもって磨いている。以前は身障協会で、ある一部を行っていたが、組織的に行いたいというので各地域ですすめている。

これは、この様な団体に限らず、婦人会やその他の団体で点検或いは整備をすすめれば、行政の手も省けるし、住民の一人一人が心がける事により、多くの運転者の事故が少なくてすむのではなからうか。

小さなお手伝いによって上る大きな成果、私共はこれを全国運動として、交通禍を少しでも少なくして、お父さんやお母さんや若者を事故から守る役割を果そうではないか。

(筑紫野市 日永田)

## めさす交通事故防止

### 新旧交替

本年度、専門員の交替は協三カ所。新規地区は二カ所です。以下左記のとおりです。

- 行橋市 大石義衛(退職) 昭野 高(新規)
- 篠栗町 西 久助(局長専任)
- 大和町 飯島勝吉(新規) 白谷義成(退職) 坂井義克(新規) 中村三郎(新規)
- 苅田町 荒川清治(新規)
- 添田町 福岡市中央区六本松
- ◆連絡先 二丁目一番二号 福岡県専門員連絡会



### 編集後記

今年も余日少なくなった。町に師走の喧嘩が走ってくる頃である。

「まなこ」八号の第二回目の編集委員会が、十二月十三日の専門員連絡会に合わせて開かれた。委員会といっても、大部分の仕事は、委員諸氏による、原稿のまわし読みで、割付けは松尾委員長と事務局にお願いすることになった。

センテンスが長がく難解になっているものには句読点を入れる。一行十七字で行数計算する。ときには専用の原稿用紙に書きかえる。この労力が大変である。

「社会福祉」という言葉が、われわれの生活全般にわたっているため、その原稿の内容もさまざま。「この原稿はもう少しつっこみがあればナー」などと、編集室はかまびすしいが、雑多な業務の中で、たくさんの方の文書に埋まってる仕事をしておられる諸氏が、原稿を寄せることは大変なことだ、苦勞が間から拝察される。

この日は忘年会も加えられ、好きな鍋と酒が出た。帰りの車中、ある先輩が「皆んな、口には出さないが壁にぶちあたっているようだ」と話された。私もこんな会に出席すると壁を感じて帰ることが多い。少し酒が入って「一つやらねば！」という気持が交錯したままボタ山の麓の駅に着いた。

(石上)